プロジェクト

CDCC による不安定核分解反応の研究 メンバー

小沢 顕、青木 保夫、 飯島 正史

目的

 1) 重イオン核反応を対象とした CDCC プログラム開発
 2) ²³Al+¹²C 反応への適用
 3)付帯的プログラムの開発 弾性散乱、 三重微分断面積

運動量分布

CDCC ? Continuum Discretized Coupled Channel

内部構造の無い粒子 1、2、3を想定
 弱束縛粒子の
 弾性散乱に分解過程を取り込んだ
 三体的散乱問題の解法





Hamiltonian H:

 $H=T_r+V_{12}(r)$ $+T_R+V_{13}(r_{13})+V_{23}(r_{23})$ $\phi(r)$ を定義

 $\{T_r + V_{12}(\mathbf{r}) - E_c\}\phi_c(\mathbf{r}) = 0$

上限設定 波数 k とスピン離散化 k

$$\hat{\phi}_{c\,j} = rac{1}{\sqrt{k_j - k_{j-1}}} \int_{k_{j-1}}^{k_j} \phi_c(k,\,r)\,dk$$

規格・直交性 $\langle \hat{\phi}_{c\,j} \, | \, \hat{\phi}_{c'\,j'}
angle_{\mathrm{r}} = \delta_{c\,c'} \delta_{j\,j'}$

位相のずれ $ightarrow oldsymbol{\delta_{lj}}(oldsymbol{k_c})$

Hの固有状態 全角運動量 J, Mを指定

$$egin{aligned} \Psi_{J\,M} &= rac{1}{R} \sum_{c,\,j} \,\, \chi^J_{L_{c\,j}}(R) \ & imes [\hat{\phi}_{c\,j}(r) \,\, i^{l_c} \, Y_{l_c}(\hat{\mathbf{r}}) \,\, i^{L_{c\,j}} \,\, Y_{L_{c\,j}}(\hat{\mathbf{R}})]_{J\,M} \end{aligned}$$

動径部分
$$\chi_{L_{cj}}^{J}(R)$$
 が満足する
連立二階微分方程式 $(T_R - E_{cj})\chi_{L_{cj}}^{J}(R)$
 $= -\sum_{c'j'}\langle [cj]_J | (V_{13} + V_{23}) | [c'j']_J \rangle$
 $imes \chi_{L'_{c'j'}}^{J}(R)$

S 行列要素 $\rightarrow S_{L_f L_i}^J(k_c)$

 $\delta_{lj}(k_c)$ と $S^J_{L_fL_i}(k_c)$ を用いて、 弾性散乱微分断面積

三重微分断面積

二重微分断面積

等を評価する。

三重微分断面積

粒子1と2の放出方向 $d\Omega_1, d\Omega_2$

粒子1の運動エネルギー dE_1

重イオン問題の特徴

大きな角運動量

大きな波数

数値的に非常に広い dynamic range

具体的問題の設定

23 Al+¹²C 反応

$^{23} m Al$ 生成と $^{12} m C$ への照射 0° での $^{22} m Mg$ の識別、運動量分析と検出



核子スピンの無視 \leftarrow 計算資源からの制約 23 Al: 陽子 $+ ^{22}$ Mg

束縛状態 d 状態 $E_c = 125$ keV

散乱状態 角運道量 $l = 0 \sim 4 \hbar$

波数 $k_{max} = 1.5$ 又は 2.5 fm^{-1}

入射エネルギーは 80 A MeV

 V_{12} :中心力ポテンシャル

V₁₃, V₂₃,: 経験的な複素ポテンシャル

分解過程を考慮

核力/クーロン力の潮汐力による

 $\phi(r)$, the 1-2 base

real, even for scatt. states

d-, p-, f-state (bound/ scatt.) wf. $0.45 < k < 0.55 \text{fm}^{-1}$



dumps at large r, which is a large merit of binning

s, p, d-states have a node r < 4 fm but not for f-state(No bond states)

弹性散乱微分断面積



緑 分解過程を無視

青 核力による分解を考慮

赤 クーロン力による分解も考慮

弾性散乱では、クーロン分解は見えない 但し、実験値未だ入手出来ない





Mg と p が入射粒子に関して、逆方向なら ば $k_{12}=0~{
m fm}^{-1}$ の谷は消える



対角線の傾きは 陽子と²²Mg の質量比

三重微分断面積の立体角積分



ー応絶対値を比較しているが、計算値はこれ から幾らか変更される可能性がある。